

## 新ロマン主義の再検討

— 明治28年～大正10年を中心として —

### A RE-EXAMINATION OF THE LITERATURE OF THE NEW ROMANTICS

Centering on the period Meiji 28 to Taisho 10

米 山 禎 一\*

In consideration of the difficulty of achieving a unified theory of the history of modern Japanese literature, in this paper I have presented my objections to the present denial by numerous critics of the existence of New Romanticism in the history of Modern Japanese Literature. I will elucidate my ideas with examples from two works by the literary theorist Yoshida Seiichi : *A Study of Naturalism* and *A Study of Romanticism*. Yoshida's opinions regarding New Romanticism can be summarised in the following three points :

1. The Shirakaba-ha cannot be considered New Romanticism.
2. The impurity of Soseki's style precludes the label of New Romanticism.
3. The Decadent Writers were essentially Late Romantics, as opposed to New Romantics.

---

\* YONEYAMA Yoshikazu 国立台湾大学日文系副教授。早稲田大学政経学部政治学科卒業。University of Washington 地域研究大学院中国研究科修了。私立淡江大学日文系専任講師、副教授、国立台湾大学外文系副教授を経て、現職。著作に『武者小路実篤－日本の超越主義者』（大新書局・台湾、1986年）、「志賀文学における〈偶然〉と運命」（『日語教学研究国際研討会論文集』、1993年）など。

Ignoring those writers who preserved the spirit of Romanticism despite the powerful influence of Naturalism, Yoshida has effectively shut out the concept of New Romanticism from the history of Modern Japanese Literature. I have therefore examined the above three points, and have proposed the following two counter-arguments :

1. New Romanticism does indeed exist in Modern Japanese Literature, and is an aspect of our literature which should be regarded as important.
2. As a counter-movement to the early and late periods of Naturalism, New Romanticism formed the first and second periods of "Anti-Naturalism."

私は以前台湾の或る私立大学で、「日本文学史」の授業を何年か担当させていただいたことがあります。その時学生さんに、日本のロマン主義や自然主義、耽美主義、理想主義などを、相互の関係の中でどのように理解させたらよいか、大変困惑したことが今でも思い出されます。今日の発表は、新ロマン主義という概念を用いることによって、この点について一つの新たな解釈を試みようとするものです。

吉田精一氏は彼の著作集第九巻の『浪漫主義研究』において、新浪漫派を「自然主義の強い影響を受けたのちに猶浪漫精神を保持した」作家群と規定し、「これは普通新浪漫主義と呼ばれ、自然主義以降の運動であることから、浪漫主義と区別されて考えられている。」と述べています。この見解は世界の文学思潮に照らして、常識的に述べたものでしょう。しかし、続いて述べられている部分は、日本での新ロマン主義について、吉田氏個人の見解を述べたものだと思います。吉田氏は、そこで、新ロマン主義には広狭二つの意味があり、一つは自然主義以降の文学を総称して新浪漫派と呼び、大正初期の漱石なども含むが、もう一つのより純粋な狭義の解釈である享乐的、唯美的、且つ頹廢的傾向の文学に限定するべきだとし、更に、日本の唯美頹唐派の性質はヨーロッパのネオロマンチズムとは相当異なるので、末期ロマン派として分類するの

が適当であると述べました。

吉田氏は、結局、日本のロマン主義を初期浪漫派、後記浪漫派、末期浪漫派に三分し、所謂後期自然主義以降の唯美顔唐派を末期浪漫派に充てることになりました。その結果、吉田氏は、日本近代文学史上には、新ロマン主義者と見做すべき作家や詩人は存在しなかったという見解を示したことになります。吉田氏は、日本の唯美顔唐派は、「ボオドレエルやヴェルレエヌの深刻とは遠い」「もっと皮相な耽美者」であり、異国情緒に浸り、「主義と行動をきらうディレッタントイスム」に陥った、「富者の浪漫主義」「貴族趣味」であると批判しています。吉田氏が最も気に入らなかった唯美顔唐派の一面は、「かつての浪漫派がぬけ出そうとした封建的なものにも、美意識を満足させれば好んで陶醉した。」という点だったと思われます。吉田氏から見ると、彼らは自然主義を超越しようとする意欲に乏しい、反動の輩だったのです。

しかしながら、私は彼らの多くがたとえそのような性格を有していたとしても、彼らのラファエル前派やフランス象徴詩への憧憬や受容のための熱意をこそ重視し、且つ評価すべきだと思います。また、彼らの中には、極めて少数かもしれませんが、真に新ロマン主義者と規定できる特質を有した詩人もいたことは事実です。例えば、相馬御風は小川未明の作品の性格を、永井荷風や谷崎潤一郎と対比しつつ、次のように述べています。「之に反して未明君の作品に現れた生活気分は人情的である、苦悶的である。而して非現実的である。否定的であつて、最後は肯定的である。絶望的であつて、同時に努力的である。暗いやうで、而も明るい。冷たいやうで而も熱して居る。知識的でなくて、情意的である。屈従的でなくて、飽くまでも反抗的である。技巧的でなくてどこまでも自然的である。形式的でなくて内容的である。」（『小川未明論』、『早稲田文学』明治45年1月）

小川未明は明治41年に新ロマン主義を研究する「青鳥会」を作りました。明治42年の「苦悶の象徴」では、「現実以外に何等か求めたい。単に有の儘の人生を見たゞけでは満足が出来ぬ。」「過去の科学が教へた処では承知が出来ず、

想像力と空想力とを以て、暗<sup>ママ</sup>の現実から支配させられつゝ、ある自己の運命を、自ら暗の現実<sup>ママ</sup>に立入つて一々其の運命の糸をたぐつて見たいのだ。」と述べています。

ここで、新ロマン主義とは何かについて、簡単にまとめておくことにします。厨川白村の概念規定を参考にして、言葉を換え、意味を補って申しますと、次のような文学思想だと思います。

- (1) 近代における科学万能主義や現実肯定主義、現実満足主義に飽き足らず、理性に基づく冷静な態度を保ちつつも、普遍的人類的な理想の達成を目指そうとする。
- (2) 充実した幸福な人生を実感するために、また、現実との争闘に供するためにも、人間存在の深奥にも通じる強い生命力や快樂の享受を渴望し、尊重する。
- (3) 人生と自然に対して誠実に向き合い、科学や合理主義の及ばない人間や宇宙の不可思議な領域、人間の運命と微妙な関わりを有する不可思議な「或るもの」「何か」の存在に対して、或いは憧憬し或いは確信する。そして、その意味を探ろうとしたり、想像力や象徴などの方法を用いて、その神秘を表現しようとする。

新ロマン主義は基本的にはロマン主義なのですが、18世紀の擬古主義や偏理主義に反対して興った旧ロマン主義と区別されます。19世紀になって科学的世界観が打ち立てられ、近代的写実主義や自然主義が唱えられた後にも、更には進化論（社会進化論も含む）が優勢になった後でさえ、個人的な直観や経験或いは合理的認識を通じて、非合理の世界の存在を信じようとします。その結果、主観の権威を主張し、自由意志に基づいて個性的世界を表現しようとします。彼らの大部分は汎神論的世界観を抱いており、宗教的とは言えなくても無神論者とも言えない思想傾向を有しています。

笹淵友一氏は、名著『文学界とその時代』（下）において、『スバル』『屋上庭園』『三田文学』『新思潮』などに参集した耽美主義の詩人や作家達は、例外

なく、自然主義思潮の感化を受けていると言っています。また、彼らは、自然主義の日常性、凡庸性、事実尊重の散文精神に甘んじ得なかった結果、美と異国的なものへの憧憬や想像の自由への欲求を抱きましたが、そこには単なる官能の充足以上の精神的欲求が感じられるとも言っています。そして、更に、永井荷風が「新婦朝者日記」の副主人公の立場を「ネオロマンチズム」と評していること、谷崎潤一郎が耽美派という彼への評語を、「羹前書」の中で、新ロマン主義の意味において承認したのは、新ロマン主義という用語が確立されていたことを証左するものだとも指摘しています。

笹淵氏は、唯美顔唐派以外に、夏目漱石門下の鈴木三重吉と森田草平の二人についても、新ロマン主義者として論述しています。しかし、漱石本人については論じていません。また、白樺派については全く言及していません。私は漱石も武者小路実篤も志賀直哉も、新ロマン主義者として論じるべきだと考えます。

ところで、清水正和氏は『ゾラと世紀末』において、ゾラの二つの自伝的作品（『クロードの告白』及び『制作』）を分析し、ゾラが本質的にはロマン主義者であることを論証しています。ゾラはロマン的精神に基づく理想的世界像や理想の人生観を、科学的知識やリアリズムの手法と対立させませんでした。そして、個人の運命と遺伝や社会構造との関連性に視点を据える自然主義を主張しました。遺伝と環境による決定論的世界観は、ゾラ自身においては、彼のロマン的精神と幸福に共存していたのだと言えるでしょう。モーパッサンの無神論から導き出される現実直写の自然主義とは、思想内容においても方法においても、全く異なる主義であったのは明らかです。反自然主義である新ロマン主義について考察するに際しては、この点も考慮に入れておく必要があるのは言うまでもありません。

新ロマン主義者が科学的思考態度や実験の成果、個人的体験の事実を尊重するのは、自然主義者と同じです。アメリカ文学史では汎神論的超越主義者（トランセンデンタリスト）を、通常、ロマン主義者に分類しています。自然主義

文学がアメリカでは20世紀初頭に興ったからです。しかしながら、このことは、エマーソンやホイットマン、ソローの時代には科学的な世界観が知られていなかったということの意味しないのは当然です。私は彼らの自然観や宇宙観、生命観、普遍的理想主義から判断して、彼らは新ロマン主義者だと考えます。エマーソンの思想はメーテルリンクの神秘思想に大きな影響を与え、彼の「自己の為」という個人主義や「どうかなる」という楽観主義の形成に与かりました。その思想が武者小路実篤や志賀直哉などを深く啓発し、彼らによって受容されたのは周知の事実です。

ワーズワースも自然主義以前の詩人ですが、思想的には科学的現実主義に反対しており、汎神論の神秘主義者であったことからして、新ロマン主義の先駆者の一人として考えてよいのではないかと思います。コウルリジとの共著である『抒情歌謡集』(Lyrical Ballads, 1798年)の中には「発想の転換をこそ」(The Tables Turned) という詩があり、そこで次のように歌っています。

我々の小賢しい知性ときたら、  
事物の美しい姿を台なしにしてしまうだけだ、－  
人間は分析せんとして対象を扼殺している。  
科学も学問ももう沢山、といたい。  
それらの不毛の書物を閉じるがいい。  
そして、外に出るのだ、万象を見、万象に感動する  
心を抱いて、外に出てくるのだ。

(平井正穂・訳)

ワーズワースは島崎藤村、国木田独歩、徳富蘆花らの思想や情念に大きな影響を与えました。独歩や蘆花は、高山樗牛や夏目漱石とともに、武者小路実篤の思想やロマン的情念に最も大きな影響を及ぼした日本の作家達でした。私は彼らを結びつける系譜の中に、日本における新ロマン主義の潮流の本流があったと思っています。

新ロマン主義について日本で最初に言及したのは森鷗外で、明治24年6月の

『柵草紙』の「鷗外文話」において、ラファエル前派のロセッティの詩想を「ネオロマンチック」として紹介しています。しかし、新ロマン主義の標語が日本近代文学の作品に対して最初に使われたのは、明治34年7月の『帝国文学』誌上での、「新ロマンチズムの勃興」という一文によってです。姉崎嘲風や戸張竹風らによってニーチェ・ブームが興りつつあった時で、その動向や気風について報告したものです。

明治34年の新ロマン主義は、高山樗牛の「美的生活を論ず」や与謝野晶子の『みだれ髪』によって代表されます。樗牛は前年7月の『太陽』誌上に「煩瑣学風と文学者」を発表し、バイロンのような「悪魔の如き力」によって、ロマン主義文学を含むそれまでの日本文学の逃避的でひ弱な体質を批判しました。彼がホイットマンやニーチェから学んだ極端な個人主義や肉体賛美、本能満足説は、美と理想への強烈な志向によって支えられており、純粋で明るく力強い自然性の肯定を主張したものでした。また、形式主義だけでなく、単なる写実や科学的現実的思考についても反対の立場にあり、自然や人生の機微、神秘的な物事に興味を抱いたことは、ほぼ同様な思想傾向にあった姉崎嘲風が『太陽』に発表した「高山樗牛に答ふるの書」（明治35年2～3月）によっても首肯されます。

与謝野鉄幹は明治33年4月に創刊した『明星』の誌名に、象徴的な意味として、女神ヴィーナスを託していました。木股知史氏によれば、ヴィーナスは美と愛の女神であるだけでなく、誘惑する官能の女神としてのイメージが盛り込まれていたのです。『明星』には毎号ラファエル前派やアール・ヌーヴォーなど、西洋美術の紹介があり、新聞版から雑誌スタイルになった第六号には、一条成美の「百合を持つ裸婦像」が表紙を飾りました。恋を象徴する百合を手にした、乳房も露わなヌードの絵でした。

ラファエル前派の影響を受けていた藤島武二は、『明星』の明治34年2月号の表紙画を描きましたが、彼の手になる『みだれ髪』の創刊号の表紙画は、ラ

ファエル前派の一人であるエドワード・バーン＝ジョーンズの『『薔薇物語』をモチーフとするタピストリー』という作品の図案にそっくりでした。『明星』や『みだれ髪』には、それらの絵にマッチした、恋や女体を賛美した短歌も載っていたのです。

田山花袋は、明治34年7月29日付け『太平洋』の「西花余香」において、「ロオマンチシズムの再興を説く者あり。而して多くはその重なる原因を写実にあきたらず、科学にあきたらざるものの反抗」だと述べています。このことは、笹淵友一氏の指摘のとおり、日本の文壇には既に写実主義も自然主義も成立しているという認識が、花袋にあったことを意味しています。当時、小栗風葉や小杉天外の写実主義、ゾライズムは「本格自然主義」と呼ばれ、現在考えられている以上に高く評価されていました。「ロオマンチシズムの再興を説く者」とは、写実主義や自然主義に反対する新ロマン主義者達という意味になります。

私は明治33、4年は新ロマン主義（前期）の最初のピークだったと考えます。その始まりをいつ頃、どんな文学作品に求めたらよいかは、明治42年から43年にかけての新ロマン主義（後期）のドラマチックな開始と違って、難しい問題です。森鷗外は、早くも、明治22年1月3日の『読売新聞』に「小説論」を発表し、ゾラの『実験小説論』を批判しました。また、近代写実主義や自然主義を主張した『小説神髓』の作者坪内逍遙に対して、ハルトマン美学の立場から「没理想論戦」を挑みました。鷗外が新ロマン主義の一側面における先駆者であるということは、恐らく、可能な議論だと思われます。

北村透谷のエマーソン受容を示す「厭世詩家と女性」（明治25年2月）や「松島に於いて芭蕉翁を読む」（同年4月）、「各人心宮内の秘宮」（同年9月）、或いは、北川透氏の指摘するように、徳富蘇峰の「観察」（明治26年4月）の唯物的世界観に対抗して書かれた「頑執妄排の弊」（同年5月）、代表作「内部生命論」（同年同月）などは、新ロマン主義の先駆的評論であると言えるでしょう。

しかしながら、私は、新ロマン主義の潮流は明治28年から29年にかけて動き出したと考えています。正岡子規は明治28年の10月から12月にかけて『俳諧大要』を書きましたが、その中で、「空想と写実と合同して一種非空非実の大文学を創出せざるべからず。空想に偏僻し写実に拘泥する者は固より其至る者に非るなり。」と述べています。主観を活かした「感情的写生」という考え方は、新ロマン主義的描写法と言ってよいのではないかと思います。子規が否定したのは、旧ロマン主義のステレオタイプ化した観念や現実的基盤の全くない妄想の類だったと考えます。石丸久氏は子規を象徴主義の文脈で論じていますが、象徴主義もアメリカ超越主義と同様汎神論に立ち、自然と個我との全一的融合を尊びました。

島崎藤村は明治28年頃から汎神論的自然観を抱くようになっていましたが、29年の仙台行き以後には、ディオニュソス的な生命力に対する関心を強めました。明治31年1月の『文学界』廃刊に際して、藤村は「告別の辞」を書いています。その中で、彼は自分達をP. R. B. 詩社（ラファエル前派兄弟社）に擬そうとしていたことを示唆しています。理想への情熱と生命力への渴望が顕著であった『若菜集』の時代は、新ロマン主義的であったとは言えるのではないのでしょうか。藤村は、その後、重心を自然主義に移して行くのであり、特異な思想経歴を示しています。

文壇に大きなインパクトを与えたのは、泉鏡花の所謂観念小説、特に「夜行巡查」（明治28年4月）と「外科室」（同年6月）でした。田岡嶺雲は『青年文』の7月号で、「天下が軽浮なる恋愛小説に飽き、浅薄なる侠客小説に飽き、残忍なる探偵小説に飽きて、漸く沈着なる深峭なるものをもとむる時に出て、峭拔な想に富み、深酷の筆を揮ひ、其観察は人間の皮相を徹して複雑なる人情の機微に達し、着眼は奇警にして、能く旧思想の窠臼を出で、別に小説界に一生涯を開いた、と評価しました。芥川龍之介が武者小路実篤の出現とそのインパクトについて評した、有名な「文壇の天窓を開け放つた」という言葉が想起されます。

『帝国文学』も同年8月号の「雑報」で、「近時吾文壇に一種深刻なる一新思潮の横溢し来れるは既に何人も首肯する所なり。人生の機微を捉へて、多少意味ある霊界に触れんとする跡ありとは、早稲田子の逸早く看破せし所」であり、「其想は遙に近欧の最近思想に連り、其文も一種得易からざる気概を含む。」と述べ、更に、鏡花が「新派の最も極」にいと論じました。この文脈からは、評家がヨーロッパの新ロマン主義の機運に照らして、鏡花文学との共通性を意識しつつ評価しているのが察知できると思います。

『帝国文学』の評家が、「鏡花子が猶一段の進歩を為して、真正美術の霊境を踏み、熱烈なる精神を沈静なる形に想化したらむは、今の大家は顔色なかるべし。」と評したのは、大変適切だったように思います。鏡花は翌29年には観念小説的作風を一変させ、異常性や神秘性を温存させつつも、自身のより深い情念に根差した「一之巻」や「照葉狂言」を書くこととなります。代表作の「高野聖」（明治33年2月）に直接連なる性格を有していることは、申すまでもありません。

ところで、前期自然主義は、私の見方では、硯友社的リアリズムに始まり、ゾライズムの移入へと進み、更にはモーパッサンへの関心が深まった明治35年に至ってピークに達します。小杉天外の「はやり唄」、永井荷風の「地獄の花」、田山花袋の「重右衛門の最後」などの出た年です。また、後期自然主義は島崎藤村の「破戒」（明治39年3月）に始まり、40年から41年にかけてピークを迎えます。田山花袋の「蒲団」、正宗白鳥の「何処へ」、徳田秋声の「新世帯」などが代表的作品だと考えます。

田山花袋は明治34年6月17日、7月29日、8月12日の『太平洋』誌上の「西花余香」で、メーテルリンクやユイスマンズ、ハウプトマン、ストリンドベリなどは、モーパッサンの写実と異なり、具象的主観を通じて理路明らかに幽玄界に近づき、主観と客観を一致させて、人生の最奥の神秘や人間の罪性と醜性を解明しようとしていると述べました。そして、この傾向は、フローベルやゾラの自然主義が、空想的神秘主義や汎神論的主観を加えて、趣を変えた結果で

あると解釈しました。花袋はこれを「後自然主義」、或いは「新自然主義」と呼び始めます。

ところが、花袋はそれ以前の同年4月14日の同誌「文壇漫言」で、ストリンドベリやメーテルリンクらしい人物の傾向を指して、「新ロマンチズムを奉ずる人々」と明確に述べています。花袋は、トルストイやイブセン、メーテルリンクらが、自然主義から学ぶべきものは学んだうえで、自己の深奥に生じた内的欲求に従って、新傾向の文学や思想に向かうに至った心理的葛藤には、全く無頓着だったように思われます。彼は、新傾向の文学とゾラの自然主義の外面的共通点を見つけ、前者が既に新ロマン主義と呼ばれていたのを知りつつ、それを強引且つ恣意的に、自然主義の中に統合しようとしたのだと言えます。彼には、新ロマン主義とは、科学と写実に満足しきれない者が、自然主義に決別した結果において得た指針であったことが分かっていなかったのです。

花袋は、明治37年2月の『太陽』誌上における「露骨なる描写」という有名な評論においても、自分がゾラやモーパッサンから学んだ「露骨なる描写」と姉崎嘲風の唱道する新ロマン主義とは、「大なる関係がある」などと述べています。花袋の自然主義が一貫して主観的立場を維持したのは、彼生来のロマン的性格の故であったと同時に、それが自然主義の露骨な描写を継承した描写法だと誤解した結果だったと言えましょう。花袋は、結局、本質的にはロマンチストだったゾラが自分の到達した文学的立場を自然主義と称したことは認めながら、他方では、自然主義に学ぶ所もあった新ロマン主義者達が到達して主張した文学的立場については、新ロマン主義と呼ぶことを認めずに、自然主義の一派だと言い張ったこととなります。

この辺で、夏目漱石と武者小路実篤について述べることにいたします。尹相仁（ユン・サンイン）氏は、『世紀末と漱石』において、「明治39年刊行の短篇集『濛虚集』は、漱石の多くの本の中でも、最も尖鋭なアール・ヌーヴォー感覚の溢れる書物と言える。」と述べています。ユン氏によれば、『濛虚集』は「爛熟した世紀末文化の余香の漂うロンドン留学中に生まれた漱石の耽美的感

受性の結晶」なのであり、主題や擬古的文体、美意識などにおいて、「ラファエル前派主義をはじめとして、アール・ヌーヴォー、ジャポニズム、印象主義といった世紀末の中心的芸術傾向がすべて溶け込んで」いる作品集でした。

私は、夏目漱石のロマン性は、自身の深刻な恋愛体験を根底に据えつつも、その痛切な感情と深い魂の叫びとを、ラファエル前派の絵や詩などに描かれた女性像を媒介としつつ、彼自身の豊かな想像力と感受性とによって美的に洗練し、一種崇高で神秘的な詩情にまで高めたところにあると思っています。この点においては、漱石が対抗心を抱いていた泉鏡花の文学との間に、或る種の近似性が感じられます。

森鷗外より約10年後になりますが、大塚保治も、「ロマンチックを論じて我邦文芸の現状に及ぶ」（『太陽』明治35年4月）という有名な論文で、ロセッティに代表されるラファエロ前派を新ロマン主義として扱っています。谷田博幸氏によれば、ラファエル前派は手法においては写実主義でしたが、構想においては反自然主義であり、リアリズムとシンボリズムを融合させようとしていました。微細刻明な描写より詩的想像力を優先させるようになるロセッティとその共鳴者達に限れば、理論的には、先に述べた正岡子規に近い面もあったと思います。

ロセッティに代表される官能と靈性の微妙に融合した世界の描出は、蒲原有明、与謝野晶子に大きな影響を与えたように思われます。若い谷崎潤一郎をも一時熱中させたようです。ロセッティ的女性像の漱石への影響は、『漾虚集』に限らず、「それから」や「行人」にも認められますが、作品全体を強烈な情念の表象として描いた作品としては、やはり『漾虚集』や「夢十夜」が挙げられます。漱石のロマン的な初期作品が、高度な知識によって裏打ちされているにもかかわらず、非理知的、神秘的、幻想的な雰囲気醸し出しているのは、主題に沿って、ロセッティ的なラファエル前派の耽美的イメージや詩的想像力が、象徴的手法によって表出されているためです。漱石の新ロマン主義者としての一面は、ここにあります。

漱石は、他面、人間の深層心理や無意識領域に生じる不可思議で神秘的な諸

事実、諸現象に対して、強い知的な興味を抱いていました。「吾輩は猫である」において、副意識（潜在意識）についての言及があるのは周知の事です。島田厚氏は、「漱石の思想」（『文学』、昭和35年11月、36年2月）において、明治40年5月の『文学論』では自然主義の理論的立場にあった漱石が、同年4月の発表ながら『文学論』よりずっと後に執筆した講演録「文芸の哲学的基礎」においては、「意識の連続には選択を伴う」というウィリアム・ジェームズの『心理学原理』における命題に触発された結果、「思想上の革命的变化」を遂げたと指摘しました。島田氏によれば、漱石はそれによってヨーロッパ自然主義の哲学的基礎とも言うべき唯物論的決定論の呪縛から一挙に解放され、生きたいという意識の実存の根拠と理想の選択という人間中心の主体的立場とを一致させることができるようになりました。また、単なる日本自然主義への批判という立場から、自然主義そのものを批判する立場に移ることもなりました。漱石は、花袋の場合と異なり、自己の内面において体験的且つ意識的に、自然主義から新ロマン主義的立場に移行したのだと言えます。

しかしながら、漱石の厳格な理知主義は、明治41年2月の「創作家の態度」における、神秘が一種の錯覚であるかもしれないという考え方に示されているとおり、漱石を唯物的決定論の呪縛から完全に解放していなかったことに、注意すべきだと思います。しかし、漱石は、それでも、「自然」という根源的な存在との調和的合一に憧れ、「天」を信じようとしました。漱石は自分の思想が矛盾していることを十分意識していたはずですが、彼はその理想的心情を最優先させました。白樺派の青年達が、鷗外や藤村でなく、漱石を敬愛したのは、豊かな魅力ある知性への畏敬の念や、前述したロマン的心性の崇高性への共感だけでなく、この点でも共鳴していたからだだと思います。

田山花袋や生田長江が揶揄した武者小路実篤の「お目出たき人」には、花袋の初期作品中に見られるような、単に抒情的で憧憬的な、ひ弱なロマン性とは異質なロマン性とデカダン性が含まれています。そこには純粹な恋情とともに、理想を実現させようとする強い戦闘意欲と人格向上への意志に支えられた、健

康で若々しい生命力の発現が見られます。

新ロマン主義の観点から見て、武者小路実篤と夏目漱石の思想上の相違点は、主として、次の諸点にあると思われます。

- (1) 武者小路は青年期の前段階で、自身の体験に基づいて、神秘的な「或るもの」や「自然」の存在について確信を抱くに至っていたが、漱石にはそのような原体験がなく、最晩年に至るまでは、唯物論的決定論の呪縛から完全には脱することができなかった。従って、「天」や「自然」の存在についての確信が揺らいでいたと言える。
- (2) メーテルリンク後半生の深い智慧と結合した神秘的楽観的人生観に対し、武者小路は自身の深い実存的欲求に基づいてトータルに共鳴できたが、漱石は人間の理性を超える（と感じられる）神秘の存在への懐疑から、それを重視しようとしなかった。
- (3) 大津山国夫氏が『武者小路実篤論』で指摘したように、武者小路が我執を「自然」の中に救済しようとしたのに対し、漱石は「自然」の名によって我執を断罪しようとした。
- (4) 武者小路の「生命」への関心は、清濁合わせ飲んででも、豊かで強靱な生命力を自分自身のものとするところにあったが、漱石のベルグソン受容はほとんど知的な関心に終始した。

吉田精一氏は、『自然主義の研究』（下）において、白樺派を反自然主義の「理想主義」としてのみ規定し、コスモポリタンの面を除けば、その面で漱石と同じであるとしています。しかしながら、漱石と共通するという白樺派の理想について、「澁刺たる人生更新の理想に燃え、単に感覚的、物質的なものが唯一の現実と考へることをやめて、生命の無限の力をも現実として考へるところから出発した。」と述べているのは、明らかに漱石の理想主義の範囲を超えている面があります。性欲が「内部の自然」と、更には「内部生命」とも対等なものとして、肯定的、楽観的に捉えられ、生命賛美の中で尊重される地位を与えられるのは、与謝野晶子という女性を別にすれば、武者小路実篤の登場

を待たなければなりません。武者小路は高山樗牛の美的生活の精神を取り込み、欧米の深みのある力強い精神力と生命力に満ちた芸術によって自己を深く耕し、その栄養分を貪欲なまでに吸収したのです。

漱石が大正5年11月に門下生に語ったという「則天去私」という言葉に対して、武者小路は「自己を生かし切れ、(中略)則天は自づから得られる(傍点は原文)」と言いました。大正6年1月に、『青空』という『白樺』の衛星誌で、読者の手紙に答えた文章においてです。この言葉には、神秘主義、普遍主義的理想主義、生命主義が三位一体的に表現されており、新ロマン主義の精神と思想が集中的に表れていると思います。漱石も、「則天去私」によって、それに近い立場を表したかったのかもしれませんが。大正4年の「断片」に、「大我は無我と一ナリ故に自力は他力に通ず」という言葉が見られるからです。しかし、「則天去私」は、やはり、「無我」と「他力」という、消極的受動的な生命観の思想表現であるように思われます。

日本近代文学史は、近代的な政治的理想主義を啓蒙する政治小説に始まりました。政治小説はロマン的でしたが、個人の性格描写とは無縁であり、近代的なロマン主義文学とは言えない内容でした。近代ロマン主義に関する理論の紹介は、中江兆民訳の『維氏美学』を除けば、写実主義と自然主義を紹介した『小説神髓』や『小説総論』に先を越され、実作においても「露団々」、「風流仏」、「帰省」、「舞姫」などは「浮雲」に後れて発表されました。日本の近代ロマン主義文学は、森鷗外や『文学界』同人達の情緒的ロマン主義、幸田露伴の理想的神秘的ロマン主義、および徳富蘇峰を中心とした近代主義的理想主義に始まりました。これらの人々は尾崎紅葉を中心とした硯友社の写実主義、自然主義の文学と対立的な位置にあり、日本における前期ロマン主義(旧ロマン主義)を形成していたと解釈できます。

日清戦争後、硯友社文学の中で、人間や社会の暗黒面を殊更強調するような写実主義文学が顕著になり、更にゾライズムが試みられることによって、前期自然主義のピークが形成されます。このような潮流の中から別れ、理想主義の

精神と神秘的な観念世界とを深い情念とともに表現したのが泉鏡花であり、民友社の功利主義と唯物論的側面に背を向け、北村透谷の晩年の思想に学ぼうとしたのが島崎藤村でした。透谷晩年の神秘主義や理想主義は、藤村よりも、むしろ徳富蘆花や国木田独歩の文学に深く通底していると思います。鏡花、独歩、蘆花の三人に加え、『明星』の人々、高山樗牛の活躍が揃うことで、私は明治33、4年に日本における新ロマン主義（後期ロマン主義）が、最初のピークを形成したと考えたいと思います。（前期新ロマン主義）

新ロマン主義の潮流は、その後も、蒲原有明、木下尚江、綱島梁川、夏目漱石などが加わり、さまざまな形で受け継がれて行きます。そして、明治39年の島崎藤村の『破戒』以後に隆盛を迎えた後期自然主義に対抗して興ったのが、明治41年12月の「パンの会」結成に始まる後期の新ロマン主義です。明治42、3年には『スバル』『屋上庭園』『白樺』『新思潮』（第二次）などが輩出し、全体として、自然主義に拮抗する勢力を築くに至ります。漱石の「それから」は、この時期の代表作品の一つだと言えます。新ロマン主義の本流は、その後、武者小路実篤を中心とする白樺派によって形成されるようになり、その周りには『エゴ』（大正2年10月創刊）や『生命の川』（大正5年10月創刊）など、所謂『白樺』衛星誌が輩出しました。白樺派は大正5年から『白樺』創立十周年に当たる大正8年頃までがピークで、信州白樺派の運動に代表されるように、その影響力は拡がりにおいても深みにおいても空前のものでした。従って、後期新ロマン主義はこの頃がピークであり、私は大正10年頃までを新ロマン主義の時代と考えています。

夏目漱石は新ロマン主義者であることを否定したことがあります。また、武者小路実篤が新ロマン主義者と呼ばれたことはなかったと思います。しかし、漱石の否定は耽美類唐派と同一視されることを避けるためであり、また、当時既に顕著であった文学思潮理解の混乱した状況において、一つのイズムの旗の下に振り分けられるのを嫌ったためだと思われます。私は夏目漱石は、新ロマン主義者であったことを実質的に自認した永井荷風や谷崎潤一郎以上に、新ロ

マン主義的だったし、武者小路実篤は日本における新ロマン主義の代表的人物だったと考えます。

最後になりますが、明治28年に始まり34、5年をピークとする前期自然主義が未熟であったように、同時期に始まり33、4年をピークとする前期新ロマン主義も未熟な段階にありました。また、後期自然主義が日本の特色を見せたように、後期新ロマン主義にも日本の特色（社会背景の描写の意識的切り捨て）が見られました。そこには、戦前における日本近代文学に共通する、思想表現の越えられない限界があったのです。しかしながら、後期の新ロマン主義文学は、近代日本の歴史において、将来も受け継がれて行くに違いない文学の種子を最も実り豊かに生み出し、それを日本人の心に最も深く植え付けて来たのではないのでしょうか。

#### 参考文献（引用順）

- (1) 吉田精一『浪漫主義研究』、桜楓社、1980年。
- (2) 厨川白村『近代文学十講』、大日本図書、1912年。
- (3) 笹淵友一『「文学界」とその時代 下』、明治書院、1970年。
- (4) 清水正和『ゾラと世紀末』、国書刊行会、1992年。
- (5) 平井正徳編『イギリス名詩選』、岩波書店（文庫）、1990年。
- (6) 木股知史『「明星」と美術』（上田博・富村俊造編『与謝野晶子を学ぶ人のために』、世界思想社、1995年）。
- (7) 笹淵友一『浪漫主義文学の誕生－「文学界」を焦点とする浪漫主義文学の研究－』、明治書院、1958年。
- (8) 北川透『北村透谷 詩論Ⅱ 内部生命の啓』、冬樹社、1976年。
- (9) 石丸久『写生論序説－芸術的認識の諸相における「写生」－』（『日本近代文学』、1967年11月）。
- (10) 尹相仁『世紀末と漱石』、岩波書店、1994年。
- (11) 谷田博幸『ロッセティ－ラファエル前派を超えて』、平凡社、1993年。
- (12) 島田厚『漱石の思想』（『文学』、岩波書店、1960年11月）。
- (13) 大津山国夫『武者小路実篤論』、東京大学出版会、1974年。
- (14) 吉田精一『自然主義の研究 下巻』、東京堂、1958年。

#### 討議要旨

座長から、新ロマン主義と自然主義の時期的な関係などについて質問があり、それに対し発表者は詳細に自説を展開された。漱石を新ロマン主義とするのかとの質問があり、発表者は、漱石の理想主義的側面に注目して新ロマン主義に入れたいと答えられた。